

# 聖エラスムスとエラスムス像 上

坂 本 満

一、貨狄の名称

二、貨狄像の竜江院への伝来経路

三、リーフデ号のエラスムス像

四、リーフデ号の船団

五、聖エラスムス伝説と貨狄

六、ヨーロッパにおけるエラスムス像と貨狄像（以下次号）

(a) マサイスとユマニスト肖像画

(b) デューラーとエラスムス

(c) 息子のハンス・ホルバインとエラスムス

(d) 父のホルバイン、クラーナハその他

(e) エラスムスの肖像彫刻と貨狄像

栃木県佐野市にある曹洞宗の仏寺竜江院に貨狄像として伝わった異態の木像が実は一六世紀のユマニスト・エラスムスの肖像彫刻であることが判明してから、かれこれ半世紀を迎えようとしている。それに今年はまだエラスムスの生誕五〇〇年にあたって、生地のリッテルダムで開催される国際的な記念行事にその像の参加も予定されているとのことである。<sup>註一</sup>および補記

そのデシデリウス・エラスムスの像が貨狄像とされてきた数奇な運命

聖エラスムスとエラスムス像

は新村出、村上直次郎、幸田成友、岡田章雄氏らの博索によって明らかにされてきた。その像に直接関係する限りでは、もはや附け加えられるべきとくに新しい事実はほとんどないといってよいであろう。にも拘らずここに一文を草するのは一つにはエラスムスが中国古代の伝説的人物「貨狄」に変名をとげるに至った経過について、これまで行われてきた考証と推論に加えて、ヨーロッパ中世末の「黄金伝説」補遺に附加された聖者エラスムスの伝説との関り合いの可能性を記して読者の御批判を乞うためである。<sup>註二</sup>

第二にはリッテルダム生れのユマニストは北ヨーロッパの当時の一流画家たちのモデルとして数多い肖像画を残し、版画、メダル、彫刻などにもその像を刻ませているが、日本渡来の木像がそれらの肖像作品中に占める位置をいくらかでも明らかにすることを考えてエラスムスの肖像を紹介したのであるが、その木像と直接関わりのないものも多いために第六節(e)以外は蛇足に過ぎたかもしれない。しかもこれについては西洋美術史研究の環境としては辺地に過ぎない筆者の資料的な制約と語学力の不足もあって残念ながら意図するところを果せたとはいえない。御

叱正と御教示を賜れば幸いである。

# 一

まずエラスムス木像の発見とそれが竜江院で伝えられてきた貨狄という名称の由来について先学の研究を紹介することからはじめよう。

新村氏によるとこの木像の発見は一九二〇年の二・三月頃であり、そ

の年八月発見者の丸山源八氏編輯、「足利考古図集」第五六図に「耶蘇教僧木像」と題して初めて公表された。その解説には、この像が「荷狄<sup>カキ</sup>様<sup>サマ</sup>」と呼ばれてきたこと、そして一六・七世紀の日本キリスト教関係の研究も手がけていた東大の西洋史教授坪井九馬三氏から「カテキ」とは

ポルトガル語のカテキスタまたはカテキズモの転訛であろうとの教示を受けたことが附記されていることである。<sup>註四</sup>「足利考古図集」発刊の少し前に丸山氏の案内で竜江院を訪れた久保田米斎、林若吉の両氏は、木像のかかげる卷子にエラスムスの名と一五九八なる年記とを判読して新村氏に報告している。<sup>註五</sup>像の本体や伝来について広く世間に知られるよう

になったのは一九二五年から二・三年の間になされた主に村上・新村両氏による内外の諸資料を相い補い相い競うかのような研究発表によつてである。

貨狄という名称の由来については新村氏の研究がある。<sup>註六</sup>それによると

貨狄の最古の出典は「漢魏遺書鈔」中の「世本」にあつて、黄帝の二臣の船の創始者として共鼓の名と併記されている。<sup>註七</sup>それ以後の幾多の漢籍

中に共鼓と貨狄の名が現れるが、わが国では観阿弥清次の代表作の一つ「自然居士」に貨狄一人だけが引用され、「藤栄」やそれ以後の謡曲「遊

行柳<sup>註八</sup>」なども「藤永」「自然居士」を套襲してか共鼓の名は忘れられたままである。

「自然居士」によると、黄帝は逆臣蚩尤<sup>しゅうゆう</sup>を討とうとしたが「おう江<sup>こう</sup>」を隔てるために攻めようがなかった。たまたま臣下の貨狄が池を眺めているとき秋風に散った柳の葉に蜘蛛が乗って流れていくのを見て船を考案し、それによつて蚩尤を攻めたという。この故事の直接の出典は今日では明らかではないが、新村氏によると元代の黄公紹編「古今韻会」三〇卷(序文世祖至元二九年・一二九二)を熊忠が編集しなおした「古今韻会举要」三〇卷(序文大元元年・一二九七)にまとまった形でその伝説が現れるばかりでなく、これには一三三五年の他序をもつ元版や朝鮮版が古くから日本に伝来しており、応永五年(一三九八)の五山版も存在するところから「古今韻会举要」通称「韻会」に出典を求めるのが最も蓋然性が高そうである。<sup>註九</sup>

貨狄の故事の中国原典はさておき、その名称は謡曲が桃山時代から少くとも江戸時代初期にかけてはそれに代るべき適当な芸能がなかったためもあつて公家階級ばかりでなく、とりわけ武家階級に愛好者層を拡げながら盛んに行われ、それにもなつてしだいに人口の膾炙するところとなつていったと思われる。<sup>註一〇</sup>その影響として同時代の茶器とくに花活の銘などに貨狄の名がとられるほどであつたが、そのことはこれらの芸能が形式的にも完成したその時代の、それにたずさわる人々の趣好に適うだけのニュアンス、多少なりともエキゾチックなそれが、貨狄という名称にまだ保たれていたことのしるしとみることができであろうか。

慶長五年(一六〇〇)に日本に辿りついたリーフデ号に艤装されていたエラスムスの像が貨狄の名をうる大雑把な文化的背景としては、不充分

ながら以上のような状況を想定することが許されるであろう。

## 二

貨狄像がいつから竜江院に伝えられたのか細かい事実の手がかりはない。それが最初に現れるのはおよそ二世紀後の編纂になる「寛政重修諸家譜」においてである。それによるとこの地における竜江院の開基である牧野氏は慶長八年（一六〇三）、將軍秀忠より下野国梁田郡のうちに三千石の采地をおくられた。これが現在同寺院の所在する地域である。当主牧野伝藏成里は武勇に秀でた人物で、かつて文禄の役に朝鮮に出征したときに「晋州<sup>ちん</sup>において鼓および貨狄の像を得てかえる」と記されている。<sup>註二</sup>この「貨狄の像」が現在のエラスムス像そのものであるという証拠があるわけではないが、一般に貨狄像なるものが類のない作例に属するものであることを考慮に入れると同一物と認めて大過はないであろう。<sup>註三</sup>

「鼓および貨狄」が「共鼓貨狄」の誤読によるものであり、その像が船に縁りをもっていたために謡曲からまず貨狄の名をとり、つぎに中国の故事に再び結びつけて共鼓と並記されたものをさらに別人が鼓と貨狄に誤読したのではないかとする新村氏の推察は納得しやすい。<sup>註四</sup>

一五九八年の年記のあるエラスムス木像を文禄二年六月（一五九三）の晋州攻撃のときの分捕品とする年代錯誤からしても（牧野成里の朝鮮出征は事実であるが）貨狄像の朝鮮伝来説には疑問がある。しかしヨーロッパ系統のものを朝鮮に仮托する例は他にもあるのであながち不利な証言とのみいうことはできない。ウィリアム・アダムスを朝鮮人と伝えたものもある<sup>註五</sup>ほどだからである。

では貨狄像が牧野氏に所属するまでの伝来経路はどうであつたろうか。像そのものに関しては日本には何も記録が残っていない。しかしそれを船尾に飾っていたリーフデ号とその航海士ウィリアム・アダムズについてならいくらかの事実がわかっている。

慶長五年三月一六日（一六〇〇年四月二十九日）、豊後の臼杵に近い佐志生の海岸にオランダ船が一艘漂着した。<sup>註一六</sup>ロッテルダムを五隻の船団で出港以来二ヶ月たつてこのリーフデ号だけが日本に着いたのである。中には二四人の生存者がおり、歩けるものは航海士アダムズなど七人にすぎなかった。残りの三人は翌日死に、他の三人も長く患つた末に死んだ。

二三日たつて臼杵の港に曳航され、その地の城主太田重正に引き会わされた。その知らせは重正から長崎奉行寺崎志摩守広高を経て大阪城の豊臣秀頼のもとにも伝えられたらしい。船長代理のアダムズと他にもう一人の船員は五月二二日に大阪に出頭を命ぜられ、当時西の丸で実権を握っていた徳川家康の引見を受けた。二人は四〇日ほど投獄されたのちその間すでに堺に廻航されていたリーフデ号に乗って関東に向つた。しかし途中遠州灘で暴風雨にあつて船体の破損がひどく、かろうじて浦賀に入港した。その後リーフデ号は関東で材木の運搬に用いられた<sup>註一七</sup>とも、浦賀で破船したともいうが、いずれにしても日本の領海内でその運命を了えたことは疑えない。<sup>註一八</sup>

ところで日本在住のイエズス会士たちは、新教徒でしかも独立戦争中であつたから反逆者でもあるオランダ人の船が初めて日本に着いたことに神経を尖らせていたが、その本国宛の報告には、慶長五年七月に家康が赴いた会津の上杉景勝征討に元氣のあるオランダ人を砲手として参加

させたという記事を載せている。<sup>註一九</sup>リーフデ号が大型大砲を一八門か二〇門の他に小型大砲数門、小銃五〇〇挺、砲弾、火薬、鋼鉄製鎧などを積んでいたことは数種の記録に残っていて、<sup>註二〇</sup>関ヶ原の戦いの直前というだけでなく人々の関心の高かったことがうかがえる。これらの積荷の多くは大阪方には内緒で関東に廻されたと考えられる。<sup>註二一</sup>これらの武器が会津と関ヶ原で使われたという推測も一概には斥けられない。<sup>註二二</sup>

英人のアダムズはその学識と人柄とによって家康の寵遇をうけ、家康に幾何学や数学を教え、命によって自ら指揮して八〇トンと一二〇トンの二艘の洋船もつくった。家康は豊臣氏に最後の止めを刺すために銃砲や鉛、火薬を周到に準備していたが、アダムズは平戸と江戸の間を往復しながらそれに一役買っている。<sup>註二三</sup>それだけでなく砲術に優れていたために寵をえたという伝えもある。<sup>註二四</sup>アダムズあるいは元リーフデ号の乗組員が砲術の知識を教えたとすれば、やがて慶長一年に持筒頭となる牧野成里との関係も、新村氏に従って、考えられて然るべきであろう。<sup>註二五</sup>朝鮮人と誤伝されたアダムズと朝鮮から貨物を見たという「寛政重修諸家譜」の伝えとは、文禄の役という年代の誤まりを棄てるならば容易に結びつくものではなからうか。成里は慶長一九年四月に没して竜江院に葬られた。その子、成純は島原の役に軍監となって功績があつたが持筒頭にはならなかった。

リーフデ号がいつ廃船となつたかは不明である。長い航海と遠州灘での暴風雨で船体は傷んでいたという。エラスムスの木像を取り外したのがいつであつたかも明らかではないが、それが牧野氏に帰属したのがリーフデ号の乗組員と砲卒五〇人を率いる成里との交流に関係があつたと

すればその時期はおのずから限定されるであろう。

ところで東京国立博物館には皮製の淡彩を施された三枚の海図がある。その一枚に記された年記、筆者等からリーフデ号船載のものとする幸田成友氏の紹介がある。<sup>註二六</sup>これが事実とすれば航海士アダムズが大阪城西の丸で家康に見せた世界の海図というのはこれらであつたかも知れない。

### 三

エラスムスの木像がリーフデ号の船尾(艫)に艤装された彫刻であることが明らかになったのは日本では村上直次郎氏の力によるところが大きい。

はじめ村上氏はこれを船首像と考え、これに因んだ船名を探して一六〇二年にオランダで東印度会社結成後東洋に派遣された一五隻の船団中に二七〇トンの快走船エラスムス号の名を見いだした。<sup>註二七</sup>奇しくもこのエラスムス号も日本でその命運を了えている。一六二八年六月(寛永五年五

月)、台湾で末次平蔵の手代浜田弥兵衛と台湾長官ピーテル・スイツとの事件に際して交換したそれぞれ五人づつの人質を乗せて長崎にきたオランダ側の船がエラスムス号である。かねてオランダ人にかずかずの怨恨

を抱いていた日本側は人質のみならずエラスムス号乗組員の一部をも捕えて大村や有馬に投獄し、平戸の商館も閉鎖した。リーフデ号とアダムズらの努力で拓かれた貿易路はこれによって一時閉される。八年間の貿易中断の間に、その知らせがオランダ側の「大小数千の人々」に祝われた末次平蔵の狂死もあつたが、エラスムス号もまた長崎の「梅ヶ崎につ



註一九  
なぎ朽」るに  
まかせられ  
た。

エラスムス  
像をその船の  
艤装像と考え

挿図1 リーフデ号模型  
Prins Hendrik Maritime  
Museum 蔵（菅野陽氏撮影）

た村上氏は、島原天草の役において軍監となった牧野成純が、戦後長崎に立ち寄って朽ちた蘭船にあったこの像をもち帰ったと推定を重ねたのは、この段階においてはむしろ自然であった。<sup>註三〇</sup>しかしエラスムス像の写真が一九二六年のローマ市における布教展に出品された機会になされたロッテルダム市文書館のウィルスム博士の研究に基いてこれをつぎのように訂正した。

第一に船名に因んだ装飾像を船首につけたのはオランダでは一七世紀以後のことで、それまではライオン像をつけることが多く、船名に因む像は船尾の艫の上部につけたものである。第二にはリーフデ号はもとエラスムス号を称したことが判明した。リーフデ号と一緒にロッテルダムを出た船団中の一隻ブライデ・ボートスハップ号がスペイン側に捕獲されて取り調べられた記録中に、「司令船はエラスモと称し、エラスモであると云われる、僧形の像が船尾にあった」との水夫の陳述が残されている。<sup>註三一</sup>

これによって貨狹像がアダムズやヤン・ヨーステンらの乗ってきたリーフデ号の船尾に艤装されていたことが確実になった（挿図一）。

船の装飾は今日とは比較にならないほど重要であったが、豪華な装飾

は王や国の所有するものが主で、一六世紀には一般には意外に簡素なものが多い。とくに北海の船は外部に塗料を塗る程度で彫刻はほとんどしなかった。船首の飾りにはガリオン船の衝角の先端に紋章を示す動物がつけられることが多かった。一六世紀中葉に活躍した父のピーテル・ブリューゲル Pieter Bruegel は八枚の帆船の版画を残しているが、それによっても右のことは確かめられる。<sup>註三三</sup>ただ船尾に楯型の紋章を描いたものはあったようであるが、機能を妨害するほどに船を飾りたてるのは一七世紀中期になってからである。

こうしてみるとリーフデ号がエラスムスの彫刻を飾っていたということとはリーフデ号の、というより旧エラスムス号の何ほどのかの特権的存在のしるしであったかのようにも思われないでもないが、それについては何も明らかではない。

エラスムス木像がどのような形で船に取りつけられていたかは、現在東京国立博物館に保管されて

挿図2 エラスムス像下面 竜江院所蔵

挿図3 同背面

いるオランダ寄贈のリーフデ号の復原模型およびロッテルダムへのンドリック公海洋博物館所蔵のそれによって明らかであるが、このようにほとんど全身が露出された状態で船尾にとりつけられていたものか、一七世紀の絵画中に見るように杵飾りの中に入れられていたものか筆者に多少の疑問がないわけではない。ともあれ像の底部には縦に刳があり、それで台座の凸起に固定され、さらに像の腰のあたりにある背後まで貫通する穴によって後ろの支えにとりつけられていたのである。<sup>註三四</sup>(挿図二・三)

## 四

ブライデ・ボートスハップ号の乗組員の証言が残されていたことはわれわれにとって幸いであったが、もとはといえば同船の乗組員がつぎつぎに斃れてもはや航行不能となったために、敵国スペインの植民地であるチリのバルパライソ Valparaíso 港に避難せざるをえなかったからに他ならない。船と積荷はたちまち没収され、乗組員はカリヤオというところでスペイン官憲の尋問をうけ、その記録がセビリヤの植民地資料を集めている印度文書館に保管されることになったのである。<sup>註三五</sup>

一五九八年六月二七日に「運命の皮肉とはいえ、その名も揃いも揃って幸福を約束する名称をもった五艘」<sup>註三六</sup>「希望」<sup>ホープ</sup>「慈愛」<sup>リーフデ</sup>「信仰」<sup>ハローフ</sup>「誠実」<sup>ブライデ・ボートスハップ</sup>の船団がロッテルダムを出港してから、とにかく二二カ月目に目的の東洋に到着したただ一艘のリーフデ(約二四〇トン)については前節に記した通りであるが、その他の四隻のうちハローフ号は途中で引き返したものの出港後二五カ月目に辛うじて故国にたどりつき、ブライデ・ボートスハップ号はスペイン側に、トラウ号はポルトガル側に

に捉われ、ホープ号はリーフデ号と最後まで行動をとにしたがが一六〇〇年二月二四日に太平洋上で姿を消したきりついに二度とその姿を現わさなかった。はじめにいた四九一人の乗組員中故国の土を踏んだのは三人にすぎなかったとナホッド氏は云う。<sup>註三七</sup>このような惨胆たる航海にもかかわらず、そしてこの船団を組織したファン・デル・ハーヘン会社は破産せざるをえなかったにもかかわらず、それでもリーフデ号の日本到着によって日本とオランダの貿易は開始され、アダムズの努力によって英国とも通商が開けることになった。カトリック国のポルトガルの貿易の独占はこれによって崩れるが、それはやがて起こる鎖国問題にも微妙な影を投ずることになる。

オランダにおいても一五九〇年代の後半から急激に大航海計画が昂まったが、企業の乱立による混乱を調整するために一六〇二年に国家の特別許可による東印度会社<sup>註三八</sup>が成立し、VOCのマークで幕末まで日本との関係を保った。英国でも一六〇〇年には東印度会社が結成されてポルトガル、スペインの海上支配をオランダとともに脅かし、やがて支配権をその手中に収めることになる。リーフデ号が日本に着いた一六〇〇年前後はこのように日本にとっても、ヨーロッパにおける世界政策においても重大な転換期にあったことは注目されてよい。

## 五

リーフデ号を含む船団の運命が当時の造船術や航海術の平均的水準からしても悲惨な例に属するものであったにしても、当時の航海者たちはつねに食糧の偏よりと不足からくる病氣と餓死に脅かされ、不完全な海



者と考えられたからである。

海の保護聖者としては、アドリア海一帯では「コルフの聖スピュリド  
ン Spyridon de Corfou」地中海東部では「聖ニコラス」が信仰され、地  
中海西部においては聖エラスムスがパトロンとされていた。<sup>註四五</sup>

聖エラスムスをもつ船の巻轆轤は、海岸を遠く離れてその用途を理解  
できない地方、たとえばエミール・マール氏によると、フランス東部で  
はこれは殉教の道具と考えられて刑吏が聖者の腹を裂き「洗練された野  
蠻さで」これに腸を巻きとらせたと想像したということになる。<sup>註四六</sup>

挿図5 聖エラスムスの殉教 テンペラ画 ディリク・パウツ作 1448年  
ルーヴァン市 聖ピエール聖堂

八

一五世紀にはルーヴァンの聖ピエール聖堂にあるディルク・パウツの  
もの(挿図五)、一七世紀にはヴァティカンのサン・ピエトロにモザイクで  
つくられたニコラ・プーサンによるものがとくによく知られているが、ど  
ちらもはや海とは全く切り離された場所で行なわれる殉教図である。<sup>註四七</sup>

しかし元来は腸も巻きついていなかった単なる巻轆轤を腸を巻きとる  
殉教具としたのは、内陸の人々の空想によるものではなく殉教地のガエ  
タで一四世紀にはそういう伝説が創りだされていたことが明らかにされ  
た。<sup>註四八</sup>

聖エラスムス信仰は六世紀にさか上るといわれる。<sup>註四九</sup>殉教地に近く、そ

こへの途次に彼の通過したカンパニヤ地方で最初の崇拜が起ったのは当  
然であり、その聖遺物はガエタで崇拜されていた。一四・五世紀には一  
<sup>註五〇</sup>

四救難聖人の一人としてとくにドイツ地方でその名が広まったがその効  
<sup>註五一</sup>

験は必ずしも海難に限られていなかった。しかしコルシカ島西海岸のア  
ジャッチオ Ajaccio のイエズス会聖堂には聖エラスムスに捧げられた船  
<sup>註五二</sup>

員組合の祈祷所があり、時代はさがるがスペイン随一の貿易港セビリヤ  
には一六八一年に設立された航海学校がこの聖者の名を冠され、その建  
物の西側にはレオナルド・デ・フィゲロア Leonardo de Figueroa によ  
るスペイン・バロックの代表的装飾をもつ玄関上の龕に、帆船をもつて  
立つ聖テルモの像を見ることが出来る。<sup>註五三</sup>

海上交通における彼の保護で最もよく知られているのはいわゆる「聖  
エルモの火」である。嵐のときにそれが帆柱に現れるとそれを聖者のお  
体 Cuerpo santo, corpo santo と称して嵐の晴れる前兆とした。<sup>註五四</sup>雷よけの  
信仰とこの静電気現象とはおそらく帆柱に関係あるものとして矛盾なく

置換されたのである。<sup>註五五</sup>

イタリア、スペイン、ポルトガルあるいはフランスのある地方で船乗りの保護聖者としての聖エラスムスに対する信仰が生きていた以上、スペイン、ポルトガルとなんらかの形で当時まだ密接な関係を保っていたネーデルラントの船乗りや、<sup>註五六</sup>イタリア人の航海者も働いていた<sup>註五七</sup>英国のアドムズなどが、スペイン、ポルトガルなど先進航海民族の習俗を分けもっていたことはありえないことではない。

もっとも、カルヴィニズムの浸透したネーデルラントでは、曖昧な伝説や説話に基づく聖像で飾り立てられたカトリックの聖堂から聖画、聖像を徹底的に取り払うイコノクラズムの運動が<sup>註五九</sup>独立戦争とあい表裏していた。それによる破壊は小さくなかったし、日本に漂着したオランダ人のなかにかつて熱狂的なその運動に加わったものもいなかったとは限らないが、それでもなお遼洋たる大洋を木の葉のように心もとなく漂う他ない船乗りのつねとして、彼らは保護聖者とその救済の奇蹟的な力を生前は聖者崇拜の批判者であったエラスムスの木像から思いだすことがなかったであろうか。

新村氏が考証されたように、謡曲を源泉として花活や御舟唄にとられた貨狄の意味をとって、エラスムス像は船に関係があるということと貨狄の名を享けたと推定することには筆者も少しも異議はない。しかしそのときに聖エラスムスの効験についても語られることはなかったろうか。船の創始者という概念からその守護者という類推がきわめて容易であり自然でもあるだけに、貨狄命名に際してそのような知識が参考にされることはなかったであろうか。それにしても一六世紀前半にユマニス

トの王として新旧両派の挾撃に曝されながらその平和主義と寛容、穏健な良識に基づく正義感などによってつねにヨーロッパの知識人の耳目を集めていたエラスムスについて、その没後半世紀以上を経たリーフデ号の乗組員たちはどう考えていたのだろうか。貨狄という名称にはユマニストの面影なりとも見わけることがは難かしい。しかし強いて言うならば謡曲ないしその他の芸能に由来する貨狄とは、武士階級に広く受け入れられ、やがて下層町民の間にまで拡まったとはいっても、文珠や普賢のような学問に関係ある名称、あるいは金比羅や正観音のように船に關係する信仰のように人々に馴れ親しんだ名称に結局はなりえなかったといつては言い過ぎであろうか。知識人の間で興味深く引用される名称でなかったと考えるはいけなからうか。

ホイジンガは一九二六年のローマにおける布教展にこれの写真が出品されたときに貼付されていた「オランダ・エビス」という説明が「オランダの野蛮人」と正確に翻訳されていなかったと遺憾の意を表明しているが、<sup>註六二</sup>エビスとは野蛮人を指すと同時に信仰としては少名彦命のような漂着神でもある。<sup>註六三</sup>「カテキババア」として村童にこわがられ、夜な夜な村をはいかいしてついに鉄砲で射とめられてから、それがやんだという村の伝えや、あるいは「小豆洗いババア」として薄気味がられていたと<sup>註六五</sup>伝えられるように、その像は土地に馴染みにくい存在として長く留ったようにも思われる。

註

一 ロッテルダム市のボイマンス美術館 Museum Boymans-van Beuningen で彼の生れた一〇月にエラスムスの生涯とそれに関する諸資料が陳列され、貨狄像の出品



も予定されている。他に国際的な学会も催されることになっている。一六頁、補記参照。ただし、エラスムスの生年に関しては諸説あるが、ヨハン・ホイジンガ（フイジンハ）は一四六九年（または一四六六年）の一〇月二七日から二八日とする。

(J. Huizinga: *Erasmus of Rotterdam*, 1924 宮崎信彦氏訳・筑摩叢書 1965 p. 12)。手近にある関係文献中ホイジンガと同説のものはエルヴィン・トロイ Erwin

Treu (*Die Bildnisse des Erasmus von Rotterdam*, Basel 1960) 六九年説だけを記すものはラルス大百科全書 G. L. E.) マルゴラン C. J. Margolin (*Erasmus par lui-même*, Paris 1963) 渡辺一夫氏編「エラスムスとモア」(世界の名著 17

中央公論社 1969) などである。渡辺一夫氏訳「痴愚神札讃」(岩波文庫 1966) 解説では六六、六七年説、西洋人名辞典(岩波書店 1966) では六五、六六年説を挙げる。

以上あまり意味のない列挙であるが、このように生年の不確実な理由はエラスムスが修道僧とある医師の娘との間に生れた公認されない第二子だったことによる。それについてはホイジンガ前掲書 p. 1、渡辺一夫「痴愚神札讃」解説など参照。

二 これについては「二人のエラスムス」(「山の樹」二五—六 1963) なる小文を綴ったことがある。いまの論文をほとんど脱稿に近づいたときになってわかったことであるが、新村出氏のエッセイ「海の星」(大正一四年七月「女性」所載、のち「続南蛮広記」に採録)に聖エラスムスへの言及があるが、のちにその文章を引用した「エラスムスと貨狄」にはその部分のみを省略している。なお補記参照。

三 新村出「船舶史考」更生閣 1927 pp. 101—112。「船舶史考」には「芸文」一七巻八・一〇・一一号に載せた「エラスムスと貨狄」(上・下)「エラスムス貨狄考拾遺」(1926)を再録している。本稿中の引用は同書に従う。Erwin Treu, *op.cit.*, p. 53 はいかなる根拠によってか発見年度を一九一九年とするが、公表されたのが一九二〇年であることは新村氏などの文献に従うのがよいであろう。

四 Catechismo はカトリック信仰の基本となる教理問答書で「公教要理」と訳されている。catechista とはそれを聴聞する者であるが、一六・一七世紀に日本で用いられた例はきわめて少ないことである(新村、前掲書 pp. 121—123 参照)。しかし、新村氏も報告者の林若吉氏らとともに当初はそう考えていた。

五 現在 ERA MVS/R TE M 1598 が辛心うごひ判読である。

六 新村 前掲書。

七 「和漢三才図会」巻三四、船舶類に、初めて船を造った人については異説が多いとして列記しているところに従うと、虞姁呂氏春秋、但益發蒙記、工倕墨子、番禺山海經、共鼓貨狄世本で、事物起源には黄帝が蚩尤を征するために舟を造ったとし、さらに共鼓と貨狄は二人とも黄帝の臣でその命によって舟を造ったものであらうと記す。

八 「自然居士」は観阿弥の代表作の一つであるが現行曲は原作と多少異なる。中国故事の引用の謡曲の発展に与える意味については戸井田道三氏「観阿弥と世阿弥」(岩波新書 1965) pp. 96ff 参照。「遊行柳」は小次郎信光作とされ、「藤永」は作者不詳。

九 新村氏によると後漢の許慎の説文下八に「古者共鼓貨狄、剡木為舟、剡木為楫、以濟不通」とあり、唐の歐陽詢の「芸文類聚」巻七一および徐堅等の「初学記」に共鼓貨狄を黄帝の二臣として挙げる。木の葉の水面に浮ぶのをみて舟を造ったという記述は「唐宋白氏六帖」の「落葉」の項に現われるが共鼓と貨狄の名は見えない。張君房の「雲笈七籤」巻百、軒轅本紀になつてはじめて右に挙げた「世本」「説文」

「唐宋白氏六帖」の記述が結びついて一つのものとなる。五山版のある「古今韻会舉要」通称「韻会」は舟の字の条に「世本」「説文」「雲笈」などを引用しているとの事であり、岩波版日本文学全集の註記の如く「説文」からとするよりも新村氏の説くように「韻会」をより近い源泉とすると考えた方がよいであらう。なお補遺として新村氏は「和訓栞」(一七七七以後)に顔真卿の「韻海鏡源」からの引用があつて、それも「韻会」に近いが、観阿弥の取材能力からすれば「韻会」にまさる蓋然性はない。なお黄帝と蚩尤の争いは黄帝の伝説中最大の事件として袁珂著、伊藤敬一・高島穰、松井博光氏訳「中国古代神話」(上)(みすずぶっくす 1960) 第四章に詳しいが船の発明には触れていない。

一〇 能勢朝次氏「能楽源流考」(岩波書店 1938, 1956)によると寛正五年(一四六四)より慶長七年(一六〇二)に至る一世紀半足らずの間に禁裡、春日社、石山本願寺、法隆寺、松尾神社、本願寺、聚楽第などで上演された「自然居士」「藤永」「遊行柳」の回数はそれぞれ四六回、六回、一回であるが、「自然居士」の四回を除いては天文年間以後の上演に属し、ことに文禄元年(一五九二)より慶長七年に至る以上三曲の上演回数は四一回を数える。このことからだけでも武士階級に拡まっていた謡曲の、とくに貨狄の名に因むその普及程度が察せられる。「自然居士」は

中でもあらゆる時代にしばしば演じられている。新村氏は寛永一二年六月に伊達忠宗と池田光政とが船中で「自然居士」を演じたことを記す（前掲書p.183）。池田光政は後に述べる牧野成里が一時仕えた池田輝政の孫にあたる。なお、表章氏著「鴻山文庫文の研究―謡本の部」（1965 わんや書店）によると観世流の謡曲刊本が光悦流書体古活字半紙本から寛永二十一年三月みのや版までに六二種（幕末までには四〇八種）記され、他に進藤流などの刊本もあげられている。郡司正勝氏の「江戸時代の町人生活からみた能・謡」（『観世』第二四―一 1951）によると能・謡の最も盛んだったのは江戸初期より元禄時代までである。能舞台に困惑する町人風俗が例示されているが、横道万里雄氏によると能はともかくとして謡曲の普及度は表氏による刊本の調査にもあるように今日の常識より遙かに広かったというべきであろう。能・謡曲など芸能については美術部の永雄・エ氏、芸能部の横道万里雄氏の御教示をえたが引例や解釈に誤りがあればそれは筆者の責任である。

一 茶器のうち、とくにその形状と用途から花活に用いられた例が幾つもある（新村出、前掲書 pp. 151~157）。

一 二 「寛政重修諸家譜」巻六五二。

一 三 岡田章雄氏（『三浦安針』創元社 1948 p. 34）は「重修諸家譜」の像と同一物であるか、あるいはその像が早く失われたために、エラスムス像が貨狄の名を伝えできたものかわからない、との極めて実証的な態度を示された。しかし、貨狄が絵画や彫刻に表わされた他の例を筆者は寡聞にして知らないが、あったとすれば非常に珍しい貨狄像と、これまた例のないエラスムス像とが牧野氏の膝下にあったということになる。

一 四 新村、前掲書 p. 158~160。なお袁珂、前掲書によると黄帝と蚩尤の伝説中に楽器の鼓に関する説話がないわけではないのでそれとの混同があったのだろうか。

一 五 新村氏の挙げる（前掲書 p. 118）京都妙心寺春光院所蔵の南蛮寺の遺鐘と伝えられる洋風の釣鐘は幕末（嘉永七年）の文書によると、ことさらに朝鮮伝来を称している（永山英時編対外史料宝鑑 1 「吉利支丹史料集」 大正一五年図版解説6）、岡田氏（前掲書 pp. 34 およびその註）も「落穂雑談一言集」二十二にオランダ製石火矢と南蛮具足とを朝鮮伝来とする記述とゴロヴニン「日本幽囚記」中の記事を引用している。ウィリアム・アダムズも「通航一覧」中に引用された「相中留恩記略」

の三浦安針屋敷跡の項に朝鮮の人と註されている（新村出「貨狄像伝来経路の想定」1928 「史林」、新村出選集第二巻に集録、p. 297 引用ページは選集による。および岡田、前掲書 p. 35 註13）。その他英国の東印度会社のジョン・セーリスが博多に上陸したとき群衆に取りまかれて「コレ・コレ・コレ・ワレ」と罵られたというがこれは「高麗へ、心悪い」の意であるという（岡田、前掲書 pp. 112f）。

一 六 リーフデ号の記録は岩生成一氏訳註「慶元イギリス書翰」（厳松堂初版1929、復刊1966）のウィリアム・アダムズの最初の二つの書簡に詳しく。パジェス著吉田小五郎氏訳「日本切支丹宗門史」（岩波文庫1960第五刷 pp. 52~54、pp. 58f）にもアダムズの書簡とそれ以外の資料を用いてこの事件に触れている。その他の文献等については岡田、前掲書が非常に参考になる。岡田氏の引用する Diego de Coute (*da Asia, Decada, XI. Lisboa 1788*) の記録はとくに興味深い内容を含んでいる。

一 七 岡田、前掲書、p. 29 Coute からの引用による。

一 八 新村出選集第二巻 pp. 265f 「通航一覧」（刊本第六冊）巻二二九「阿蘭陀国部」一、入津通商の条に、異船が堺に入港、その船員を江戸に喚問したが、本船が風破のために浦賀に打寄せて破船したとあり、慶長一三年の条に蘭船が平戸に来て前に日本に漂着した船の消息を尋ねたという。その船が帰国していないからである。船長のクッケルナックは慶長一〇年（一六〇五）日本をはなれてマレー半島のバタニにゆき、翌年ポルトガル船と戦って死んでいる。その他の船員たちも二年ほどのうちにリーフデ号の財産を分けて散会している。岡田、前掲書 p. 54、幸田成友氏「東と西」pp. 14f。

一 九 岡田章雄、前掲書 p. 29 Coute の記事による。

二〇 前掲書 pp. 26 f. イエズス会通信や Coute の他「当代記」慶長五年春の項。新村出、前掲書 p. 294。オスカ・ナホッド富永牧太氏訳「一七世紀日蘭交渉史」（養徳社1956 p. 67）は一六〇一年一月三日ボルネオで日本船員から「大きなオランダ船が哀れな状態で日本に漂着し」、「船員は病氣と餓えのため一人しか生き残らず、にもかかわらず、多くの大砲とレール（？）とを携えている」という知らせをうけたオランダ船長オリフィエ・ファン・オールトがいることを記す。原著 Oskar Nachod, *Die Beziehungen der Niederländischen Ostindischen Kompagnie zu Japan im siebzehnten Jahrhundert*. Leipzig 1897.

二一 岡田、前掲書、p. 30 f. 堺に入港したイギリス船が具足鉄砲を数多くもっている、内府公がこれを見て狸々皮などを売却させただけで帰国させたところ。関東に廻航させたことを知らないらしく、唐船の敵船であるのに黙って帰国させたというので残念がっているのである。また岩生訳、前掲書、p. 19 f. 参照。

二二 岡田、前掲書、p. 29 による。新村出、前掲書 p. 294 f. p. 298 ではそういう可能性に否定的である。

二三 岡田、前掲書、pp. 131 f. 岩生成「鎖国」(中央公論社「日本の歴史」巻一四 1966 pp. 163~165)

二四 新村、前掲書 p. 296 ff. 「相中留恩記」を引用し、他に寛永二〇年に奥州南部の海岸に漂着したオランダ船の船員に江戸で砲術を教えた例も引く。幸田成友、前掲書、p. 15 によるとリーフデ号乗組員のあるものは平戸で大砲の铸造や砲術の教授をした。岡田章雄、前掲書、p. 29 p. 40。ナホッド、前掲書 p. 67 も同前。

二五 新村、前掲論文 pp. 300 f

二六 幸田、前掲書、p. 251 によるとボクサー C. R. Boxer の「日本に於けるヤン・コンバニー」一六〇〇年—一八一七年」の紹介である。同氏著「日欧通交史」(岩波書店一九四二年 p. 171) 及び Nohuijs, J. W. van. *Zeeakten van Het*

*Schip de Liefde Ex-Erasmus uit Ao 1598* を引用する。この中の年記や製図者名の記入されている図は「南蛮屏風展覧会図録」に複製されている。東京国立博物館収蔵品目録(絵画・書蹟・彫刻・建築編) 1952 p. 278 No. 9412<sup>7</sup> 革製南洋鍼路図 91.2×71.8cm。図中左エインツの北に於たる部分に By My Cornelis Doedtsz/

wonende Tot Aedem Inde Vier/heemskinderen Anno 1598/den 18 February stilio novo との記入がある。北は中国、朝鮮、日本、南は南極大陸、西はインドのベンガル湾、東はニューギニアの東端までを描く。中国大陸の上に花飾りとポルトガル王国紋章が描かれているのはどういふわけだろうか。日本の北東と南極大陸上に花飾りがあるが字は記されていない。No. 9350 (一) 印度洋の部 43.6×91.8 (二) 西洋西岸の部 75.7×74.5

(一) 「印度洋の部」は東は日本、西はアフリカ西岸の一部、北は朝鮮、南はニューギニアや南極大陸のない空白のままである。日本と朝鮮の部分には明らかに加筆があり、修正されている。(二) 「西洋西岸の部」は右に連なり、アフリカの希望峰から北アメリカの西半分を含む。北は英国の南半分、南はマゼラン海峡の範囲を描き、(一)

と(二)を合すると北アメリカ西岸を除いては世界図になる。図中の花模様は南洋鍼路図と異なる。赤道を中心として記入の文字が逆向きになる。この調査には東博絵画室菊地貞夫、小林忠両氏の御世話に預った。

二七 村上直次郎、ナホッド前掲書 p. 68 f. にも一六〇五年—十二月のこととしてエラスムス号の名が見える。

二八 幸田成友、日欧通交史 第一八章 この事件については後に François Valentyn, *Beschryving van Nieuw Oost-Indien*, Dordrecht, Amsterdam, 1724~26, 5 vols. を原図として石川大浪らの洋風画が残される(小野忠重氏「江戸の洋画家」三彩社 1968 pp. 69, 74) 岩生、前掲書 p. 265 大村市三浦快哉氏蔵品 秋田県立美術館平野コレクションの石川大浪作など。

二九 村上直次郎「通航一覧」所載「長崎拾芥」

三〇 村上直次郎「竜江院の貨狄様」考古学雑誌一六—七「竜江院の貨狄様」史学雑誌三七—七

三一 村上直次郎「再び竜江院の貨狄様について」史学雑誌三八—九

三二 村上、前掲論文 p. 908, Chozo Muto 武藤長蔵 *A Short History of Anglo-Japanese Relation*. Tokio 1936 Chap. III. pp. 6~14. 岡田、前掲書 p. 133.

三三 オクスフォード大学編「技術の歴史」*History of Technology* 筑摩書房 1963 第六巻下、第一八章第六節 pp. 430 f. フリューゲルの版画中一図だけ三層に張りだす船尾の平面に、下段にベガスらしい図を砲門と舵の間に描き、中段の下部には「船」一五六四年 *Die Scip 1564* なる画家の記録を入れてその上部に二つの楯型の紋章を並べる。最上段には横の帆柱と二つの紋章がある。H. Arthur Klein, *Graphic World of Peter Bruegel the Elder*. New York, 1963, pl. 10, *Man of War with inscription "Die Scip 1564"* 作者不詳の一五六六年のカチャヌ攻略を描いた銅版画中也に現れる (B. Kebble Chatterton, *Old Ship Prints*, London, 1926, 1965, pl. 15.)

三四 岡田、前掲書 p. 33. によると体には縦に空洞が貫いていてこれに円柱をとおして船にとりつけた、とされるが、博物館彫刻室の金子良運氏の御教示によると、頭部から像の右足にかけて貫通する穴は木芯の腐蝕によるものである。台座に取りつける剣は本文に記した通り像の底にある。入稿間際になって、蘭学研究会のヨロー

ッパ旅行から帰国された菅野陽氏よりヘンドリック公海洋博物館のリーフデ号模型の写真をいただいた。予定していた東京国立博物館の保管の模型の挿図と急に入れ替えることにしたが、この二種の模型の間にはどういふわけか船尾の型など数カ所に小異が認められ、船と像との大きさの比率もおかし。

三五 村上「前掲論文」岡田「前掲書」p. 33.

三六 ナホッド前掲書 p. 61

三七 同右 p. 64

三八 岡田「前掲書」第一章「板沢武雄氏「オランダと日本」至文堂 1955」岩生 前掲書「今井登志喜氏「欧州における繁栄中心の移動」誠文堂新光社 1950」その他枚挙にいとまがないが「オランダ側の細かいことについてはナホッド 前掲書が最も詳しい。

三九 Louis Réau, *Iconographie de l'Art Chrétien*. Tome III. (*Iconographie des Saints A—F*) Paris 1958. Lucy Menzies, *The Saints in Italy*, London, 1924  
Emile Mâle, *L'Art Religieux au XIII<sup>e</sup> siècle en France*, p. 292, p. 342. *L'Art Religieux Après le Concile de Trente* pp. 146. William Caxton, Edited by F. S. Ellis, *The Golden Legend or Lives of the Saints*. 「黄金伝説」*Legenda Aurea* の原著者は Jacopo da Varazze (Jacques de Voragine, 1228, 1230～1298) プシモノフの大司教になり、死後列福された。「黄金伝説」は十三世紀中期、一二六六年頃に当時伝わっていた聖者伝説を集大成したもので、はじめは *Legenda Sanctorum* と呼ばれ、一五世紀に今日の名称になった。キリストやマリヤの伝説などと使徒と諸聖人の伝記一七七章からなり、一八四六年の Groesse 版が最もよくとされる。英訳編集者の補遺に加えられた聖エラスムス伝の解説によると、一四八三年版にはなく一五二七年の黒文字版に加えられたものによるという。最初の刊行者ウィリアム・カックストン(1422～1491)は英国最初の印刷業者で、当時の大印刷業者がみなそうであったようにユマニストでもあったことは周知の通りである。「黄金伝説」は合理性を尊ぶユマニストの非難的であり、スペインにおけるエラスムスの祖述者 Juan Luis Vivés (1492—1540) も痛烈な批判をし、またトレント公会議で活躍した Melchior Cano (1509～1560) も同く非常に非難しつつも (G. G. Coulton, *Art and the Reformation*, Cambridge, 1st ed. 1928, 2nd ed. 1953. pp. 397 f. p. 401)。<sup>45</sup> ムメント公会議以後「清算される」聖者が多いのは当然であった。なお「聖エラスムス

聖エラスムスとエラスムス像

の綴りを L. Réau その他に従って列記する。ラテン語 Erasmus<sup>46</sup> フランシス語 Erasme, Agrapard, Arrache, Arras, Elme, Erne, Telme, ヴァリント語 Erasmo di Formia, Ermo, Eramo, Elms, スウェーデン語 Sant' Erasmo, Elmo, San Telmo. ヨーデン語 Erasmus, Rasmus, Asmus.

四〇 諸書に多少の異動がある。例えば L. Réau op. cit. に従った。

四一 この秘漠の聖パオロと聖マンニウスに似た話した L. Menzies op. cit., p. 153. にだけ記されている。

四二 註36参照。L. Réau. op. cit., p. 437.

四三 「黄金伝説」中ではマンニウス帝による迫害とされる部分である。挿図

4 は A. Hind, *An Introduction to a History of Woodcut*. London 1935, New York 1963 Fig. 51 (s. 1315. Paris. 271×183mm) への転写。同書 p. 117 参照。

なお「聖エラスムスの一二の拷問」などと題される木版の存在も知られている。(p. 119)。

四四 デュオクレティアヌス帝治下のごとく英訳によると、「この無慈悲な判事はこれが彼を何ら苦しめるところがないうのを見ていよいよ憤りを爆発させ、煮え沸き、ビッチと熱湯をとって最前より穴もしくは竈のなかに終止座って神に感謝と讃美を捧げている彼の聖なる口中に注ぎ込んだ。するといとも大きな雷鳴と嵐が起って聖エラスムスの坐せる竈は燃えたが、彼は何ら痛み傷つけられないのに、傍らの残忍なる全ての人々は同じ恐ろしい天候によって焼かれた」(p. 269)という。L. Réau は別の翻訳によって「ある日嵐の最中に彼が説教をしていたところ、雷がほど遠からぬところに落ちたが、彼の頭上の空は雲一つなく静まり返っていた」(p. 438)と記している。なお L. Menzies は「彼は船乗りたちの保護聖者であるが、それはあるとき天使が拷問者たちから逃れさせるために奇蹟によって海を越えて彼を運んだからである」p. 154 と記すが、前記英訳「黄金伝説」中にはこれに相当する部分が見当たらない。別の伝説によるものか不明。もともと「黄金伝説」には諸家が挙げるシリヤの司教であったことが現れない。カンパニアとフレンツァナ Frentana が現れるだけである。

四五 L. Réau, op. cit.

四六 E. Mâle, *L'Art Religieux du XIII<sup>e</sup> siècle en France* p. 342.

四七 バウツ Dierick (Dieric) Bouts C. 1420—175 の聖エラスムスの殉教図は左翼に聖ヒエロニムス、右翼に聖バルナルドゥスの描かれた三連衝祭壇画の主体をなすもので、縦八二センチ、横八〇センチ、デイルク・バウツ作、一四四八年 (Opus Theodorici Bouts. Anno 1448) の記録がある (Max Friedländer, *Die Altniederländische Malerei* III. Leiden 1934, pp. 30 f. p. 107.) また Georges Widenstein, *Les Graveurs de Pousin au XVII<sup>e</sup> siècle*, introduction par G. Cain. Paris 1957. p. 135. No. 86. のサン・ピエトロの絵の解説 (pp. 136 f.) によるとプーサンは「聖エラスムの絵」のために、一六二九年六月と九月に一〇〇枚のデッサンをし、一〇月と十一月にさらに五〇枚それに加え、ついに四〇〇枚近くデッサンをした。このために一六二四年から二九年にかけて仕事をしたが、その他にもバルベリーニ美術館やフレンツェの個人などが所蔵する同じ図柄のものがある。

四八 L. Réau, *op. cit.*, p. 438. による。しかしこのことはすでに英訳「黄金伝説」中にも記されている。

四九 Donald Attwater: *The Penguin Dictionary of Saints*, London 1965. によるが、他の本には現れない。

五〇 L. Réau, *op. cit.* ナポリ灣に臨む城が San Elmo と名づけられ、またローマの Santa Maria in Via lata 聖堂内には彼に捧げられた礼拝堂がある。

五一 一四聖人 (Intercesseurs) は一聖人と三聖女を合わせてそう呼ばれる。エギディウス Gilles アカチウス Acace、ブラデウス Blaice、クリストフォルス Christophe、クリマック Cyriaque、デオニシウス Denis、エラスムス、エウスタキウス Eustache、ゲオルギウス Georges、ウィトッス Gui、パンタレオン Panthaleon、それにバルバラ Barbe、カタリナ Catherine、マルガレタ marguerite が普通であるが、アントニウス、ニコラウスに代えられることがあり、また地方によって、たとえばバヴァリアではマグヌスカヴォルフガング、オーストリーではオスワルト、ハンガリーではステファヌス王、聖女はドロテアとマルタが現れることがある。いずれも治療に係る聖者でパンタレオンは医者で、エラスムスは註五五に述べるように腹の病気の治癒に効験がある。またこれらの聖者は不時の最期に際して祈願者の魂の救済に役立つとされる。一四世紀にその崇拜がはじまり、その発生地はレーゲンスブルクのドメニコ派修道院で、ダニューブ河流域のドイツに生れて

フランコニアに拡がった。一四四六年、ラングハイム Langheim の Hermann Leicht なる。羊飼いが裸の幼児キリストと一四聖人との出現を見て、それが巡礼地となった。ペストの流行する一五世紀に信仰が拡がったが、一六世紀には下降気味であり、とくにトレント公会議によってこの信仰が批判されてからは下火になった。しかし一八世紀にバルタザール・ノイマンの建てた後期バロックの傑作フィアッセンハイリゲン聖堂があるように、バヴァリア、スワビアの修道院ではこの信仰はと絶えていない。フランスとイタリアにはこの信仰は伝わらなかった。Réau の挙げる一六世紀のその聖人たちの像の作者たちには Hans Burkmaier、グリローネ ヴァルトとつづ伝えられた Mathis Nithart, Lucas Cranach, Jacob Schick de Kempton, Gérard Horebout などである (L. Réau, *op. cit.*, Tome III. pp. 680—683) 息子 Hans Holbein にも一九世紀初頭の模写でしか伝えられていないが作品があった。これらの図中の聖エラスムスは腸のような紐状のものが捲きついている横に柄のついた杖のような棒をもつ司教姿である。

五二 L. Réau, *op. cit.*

五三 *ibid.* 及び G. Kubler and M. Soria: *Art and Architecture in Spain and Portugal and their American Dominions 1500—1800*, London 1959, p. 32.

五四 L. Mezieres, *op. cit.*, L. Réau, *op. cit.* にも記されている通り北方では聖ヘレン、聖ヘルモの火ともいわれている。後で引用する「イギリスの故事」ではイタリアでは「聖パテロと聖ニコラスの火」と呼ぶという。この現象を科学的に平易に説明した V. A. メゼンツェフ著藤川健治氏訳「自然現象と奇蹟」(世界教養全集 29 所収) 平凡社、1961、p. 436 では、この名称の起源をセント・エルモ寺院の尖塔上にし、しばしばこの火が見られたからであるという。その聖堂についてはなんの説明もない。ロッテルダムのエラスムスの「対話集 Colloquia」中の「難破」(渡辺一夫編「エラスムスとモア」所収)の中で、この名を使わないでこの現象について記し、出現する火の玉が一つだと兎徴、二つだと吉徴だという (pp. 259—272)。これはその訳註や一八世紀末に書かれたジョン・ブランド John Brand 著加藤憲一氏訳「イギリスの故事 Observations on Popular Antiquities」(研究社 1965) にも引かれるようにブリニウスの博物誌による。マガリヤンイス (マゼラン) の最初の世界一周に加わったヴィチェンザの人 A. ビガフェッタの記録の中には「聖エルモは



主帆柱のうえに二時間以上も松明のように光をはなち、聖ニコロ（ニコラス）は後帆柱のうえに、また聖女キアラ（クララ）は前帆柱のうえに輝いた」のでそれぞれの聖人に一人ずつの奴隷の寄進を誓った（「コロンブス、アメリカ」、ガマ、バルボア、マゼラン、航海の記録」大航海叢書Ⅰ、岩波書店1965 p. 601）などという記事がある。「イギリスの故事」にあるように、この現象を帰するところは必しも聖エルモだけではないことがわかるが、この航海中、それ以外の場合にこの現象が起ったときには聖エルモの名だけが引かれている（*op. cit.*, pp. 494 f. 587）。ブラジルで土民に捕えられた体験記の著者でドイツ人の船乗りハンス・シェターデン Hans Staden によると、一五四七年のことであるが大西洋上でこの現象にはじめて出会ったとき、ポルトガル船員からその呼び名を聞いている（*The Captivity of Hans Staden of Hesse*, London 1874, 西原享氏訳「蛮界抑留記」帝国書院、1961, p. 11）。ピガフェッタの場合もシェターデンの場合もこの現象のあと嵐が鎮まっている。しかしユニストのエラスムスの対話集の場合、結局難波してしまう。そのときにウォルシンガムの聖母、聖クリストフォルス、聖女カタリナ（上の二人は一四救難聖人のうち）、聖パウロその他遭難者が手あたりしだいに聖者の名を呼ぶが無駄だった。「痴愚神札讃」でもそうであるがエラスムスは聖者崇拜の不合理性を批判しているのであるが、ドイツ人のシェターデンが知らなかったようにエラスムスもこの現象を「聖エルモ」の名で呼ぶことを知らないようである。なお、図像的には帆柱上に輝く姿としての聖エラスムス像はないようである。この現象を想像力の源泉とする J. Coleridge の「老水夫行 *Ancient Mariner*」に附された Gustave Doré の挿絵を考慮するなら別であるが。

五五 このような関係は呪術にはごく普通のことである（「金枝篇」あるいはロニー J. A. Rony 吉田禎吾氏訳「呪術」ケセジュ文庫参照）。聖エラスムスの信仰自体がそういう例を示している。彼が腸を抜きとられたことからリュート奏者や楽器製造者の保護聖人でもある。その楽器には動物の腸でしぼった糸が使われるからであり、糸まきを使う糸繰り職人の聖者にもなった（L. Réau, *op. cit.*）。腹部に関係あるあらゆる病いや出産についても祈ると効験があるとされ、腸が複雑にからまっていることから、ソワソンの近邸リュイ L'Huys près de Braine の聖堂でもつれた糸を聖エラスムスの像の頸にかけて子供の病氣平癒を祈るといふ（E. Male, *Lart*

聖エラスムスとエラスムス像

*Religieux au XIII<sup>e</sup> s.*, p. 342)。

聖エラスムス信仰の効験についてすでに船乗りのパトロン、救難聖人のそれについて右のような信仰例を示したが、この序でにロットテルダムのエラスムスが「痴愚神札讃」中でこの聖者に「一定の日に、一定の小蠟燭と一定の短い祈禱を奏れば、それですぐさま金持になれると思ひこんでいる連中」（岩波文庫 pp. 111 f.）を嘲弄しているのは、そのような信仰もあったと考えてよいだろう。

五六 スペインからの独立戦争中もオランダ商船はスペイン貿易を完全に停止してはいなかった。他国旗をつけてリスボンに入港したり、その他の港を通じて銃砲、弾薬等までひそかに取り引きしていた（ナホッド *op. cit.*, p. 45。およびアンリ・セー著土屋宗太郎・泉俊雄氏訳「近代資本主義の起源」1926 創元文庫1954 pp. 74f.）また遠距離航海の知識に関してはスペイン・ポルトガルのもつ航海知識は船乗りの重大な関心事であった。彼らの船に乗ってえた経験は一五九五年に刊行されたヤン・リンズホーテン Jan Huyghen van Linschoten の「ポルトガル人東方旅行記」のように、プランキウス Peter Plancius (1552—1622) の世界地図とともにオランダの大航海熱を直接鼓舞した。このようなことからして北方の航海者も地中海人の聖者信仰の知識を分けてもっていた可能性は考えられてよいだろう。

五七 別枝達夫・護雅夫氏著「絹の道と香料の島」（文芸春秋社「大世界史」6 1968）p. 324. によるとフランスのフランソワ一世のもとで北米東岸探検に従ったフィレンツェ人ジョヴァンニ・ヴェルツァノ。英国ヘンリー七世に仕えたジェノヴァのカボット父子。

五八 「前掲書」ヘンリー七世に仕えたポルトガル人ジョアンナ・フェルナンデスはグリーンランドからラブラドル方面を探った。この人的な関係だけでなく、ウェストミンスターへのヘンリー八世の礼拝堂には一五世紀の石造の聖エラスムス像がある（L. Réau, *op. cit.*, p. 439）。前掲「黄金伝説」英訳の解説（Vol. 7, p. 267）には船乗りは船酔いを軽くするためにその聖者を保護聖者としていたことが記されている。ヴェテランの水先案内人であり、またきわめて合理主義者（岡田章雄、前掲書第三章参照）でもあったウィリアム・アダムズも知識として聖エルモの火、また船乗りの保護聖者としての聖者の名を知っていなかったとは思われない。

五九 いくつものファナティックな表現の「聖ヒエロニムス」など知られる Marinus

Reymerswaele も晩年になってこれに参加し追放されている。

六〇 エラスムスが「黄金伝説」にあるような荒唐無稽な聖者伝や、迷信呪術と大差ない聖者信仰を批判するのは当然であり、「痴愚神礼讃」や「対話集」の中でしばしばかなり辛辣な批判的態度がみられるが、晩年には聖者信仰をある程度認めていたといわれる（ホイジンガ、前掲書 pp. 175—176）。

六一 同じ船員であるが、クリストバル・コロン（コロンブス）の第四次航海に参加したディエゴ・メンデスなるものが一五三六年（エラスムスはこの年七月に没する）六月十九日に作成した遺言状に僅かな数の書物を記しているが、エラスムスの著作がそのなかばを占めているのが注意を惹く。専門家でない筆者にはそれらが正確にエラスムスのどの著作に相当するか不明のものもあるが、「エラスモの美事なる死の術」（一五三四年一月にフローベン書店刊の「De Preparations ad Mortem 死の準備について」か）、「エラスモの説話、カスティリヤ語版」、「リングァ・エラスミと呼ばれている本」（以上二冊は不明）、「エラスモの対話」（一五一八年初版フローベン書店版「Familiarium Colloquiorum Formalae 対話集」）、一五二六年増訂しつ Familiarium Colloquiorum Opus と改題したものの翻訳か）、他に著者の名は記していないが「平和の争に関する論文」も、あるいはエラスムスの一五二七年フローベン書店刊の「Querela Pacis 平和の訴え」かも知れない。（以上の邦訳題名の引用は岩波書店刊大航海叢書 I 林屋永吉氏訳 pp. 246f に于て）。

エリオット氏 J. H. Elliott, *Imperial Spain, 1469—1716*. London, 1963. に于て「スペインにおけるエラスムスの侵略は一六世紀スペイン史上の最も注目すべき事件である。ヨーロッパのどの国でもエラスムスの著作がこれほどの人気をもち、普及した国はない」。そのピークは一五二七年から三〇年にかけてである（pp. 151f）。エラスムス自身一五二七年以来カルル五世の特別顧問であり、ルイス・ビベス Luis Vives, ホアン・デ・バルデス Juan de Valdés などの熱烈な祖述者もいたからである。しかし一五三〇年代にはルター派と同列と見なされて弾圧されはじめる（pp. 209f）。メンデスの遺言はエラスムスの自由主義が屈服される前の一現象を示しているのかも知れない。一五五八年に教皇パウルス四世はエラスムスの全著作を禁書とした（渡辺一夫編、前掲書、年譜参照）。

六二 ホイジンガ、前掲書、p. 210。「オランダヘイス」なる名称は「貨狄」の名と一緒

に松崎実氏が新村氏に報告している。これがいつごろからそう呼ばれていたのか、「貨狄」の名ほど明らかではない。

六三 竜江院にある明治六年五月の交割簿にすでに「貨狄尊一体」として記録がある。それは竜江院の山門に入ってすぐ左手の観音堂（現在は縮小再建されている）内に厨子入りの正観音と出山釈迦の板絵と共に安置されていたことがこれで明らかである。江戸時代には船の守本尊の舟玉神は正観音であるとされ、各地に残る観音崎、観音山がその沖あいを通過する船人たちにとって、加護の祈願の対象となっていた（金指正三氏「日本海事慣習史」吉川弘文館 1967, pp. 330—335）ことなどと考え合せて、呪術の法則に従って強いてこじつければここに安置されていたことも船との関係結びつけるものとなるかも知れないが、どこまで客観性が認められるだろうか。新村氏宛て林若吉氏の報告によると竜江院の一带は低地で不時の出水に備えて各農家は小舟の用意があったというが、それと海上の船乗りのパトロンを結びつけるわけにもゆかない。「和漢三才図会」巻三四船橋類には媽祖娘娘を俗に舟菩薩というが、日本では住吉大明神を舟神として舟玉社、大海神社などの末社があるとす

る。

六四 新村、前掲書、林若吉氏の報告にある。

六五 竜江院の現住職大沢雄鳳氏御夫妻の少年時代の伝ではそうであったとの事。

補記 「エラスムスとその時代 Erasmus en zijn tijd」と題するその記念展は Museum Boymans-van Beuningen で一〇月六日から一二月三日まで開催された。本木像は同展目録第五六八、図版第一六四に記載があり、エラスムスの名が船乗りの保護聖人の名でもあることの言及がある。抄訳の英文目録ではリーフデ号の船首像と誤記されている。この大部の目録は美術出版社の生尾慶太郎氏の御厚意によって初校時に参照することをした。